

NPO 法人 Rin かごしま 今村 麻由子

2020 年 7 月 6 日（月）から 10 日（金）の間で開催された国際エイズ会議に、NPO 法人 Rin かごしまより理事の今村麻由子が 1 名で参加した。以下に内容を報告する。

—自分がかかわっている分野を中心としたテーマの報告

私がかかわっている分野は「HIV へのスティグマと陽性者のメンタルヘルス」である。Rin かごしまの活動地である鹿児島は封建的な土地であり、HIV 陽性者に対する差別・偏見も強い。これは、十分な性教育や HIV に関する教育が行われていないことが主な原因と考えられるが、スティグマが陽性者へのメンタルヘルス（生きづらさ、鬱、自己肯定感の低さ）に影響を与え、最悪の場合自死に至るほか、無知による感染者数の増加にもつながる。今回のエイズ会議を通し、各国のスティグマを減らすことへの取り組みやメンタルヘルスへの影響を学んだ。

—参考となった研究発表の内容とその理由

研究発表名：“Stigma Kills: Time for Change”

この発表で主に話されていたのは、スティグマをなくす解決の糸口となるのが①コミュニティの力と②周囲との強固な関係性の構築ということである。研究が行われたザンビアでは、スティグマは単に家族や友人など身近な人だけではなく、同僚や医療従事者からもあった。このため、まず若い人を HIV やヘルスケアの活動やイベントに巻き込み、偏見の概念が生まれる前に、自身も社会の一員であり、HIV 関連の問題解決への主役であるという意識を根付かせた。周囲との強固な関係性の部分では、HIV 陽性者が孤立を感じないように peer to peer 等 HIV や医療関係者との支援グループだけではなく様々なグループに所属していることの重要性を指摘していた。「どこかに自分の居場所がある、何かあれば相談できる人がいる」と感じさせ孤立させない環境を作ることが大切である。

経済的な側面の問題もある。ウガンダでは、スティグマは男性より女性のほうが持ちやすいという研究結果もあった。これは貧しさに起因している。貧しければ貧しいほど、スティグマを自分自身や他者に対して持ちやすい。HIV 陽性者は経済的に困窮しているケースが多く、これがスティグマを広げる原因にもなっている。また、経済的に困窮している場合、適した医療機関へのアクセスや情報がなかったり、自身の生活を守るために「あえて HIV 検査を受けない」という選択肢が生まれる。これにより HIV への感染者数が増えるため、本人が社会で経済的にも困らないための地域・政府からの経済的な支援も必須と

のことだった。

また、メンタルヘルスの観点からだと、スティグマが減ったという目安の紹介もあった。以下の6つが主な項目である。HIV陽性者本人に、①自信がついた②恋人を見つけた③自尊心が高くなった④ストレス耐性ができた⑤関係性をうまく構築できている⑥目標を設定し、達成する力がついた。これらが達成されないと、鬱を発症するケースが高く自死にもつながりかねないということだった。

スティグマ自体がHIV・エイズに関する知識の少なさが原因の一部でもあることから、学習会や講演、セミナーがよく開かれているが、注意すべきは、こちらから多く語りすぎないことである。プレゼンテーションのスライドを増やして一方的にレクチャーするだけでは伝わりづらく、参加者全員に話す場を設けることができれば効果は上がりやすい。これはピアミーティングやカウンセリングでも同様で、メンタルヘルスの観点から重要なものは「いかにHIV陽性者自身に話をさせるか」である。

参考になった理由：HIV陽性者を社会的に孤立させない重要性は認識していたつもりだったが、複数のコミュニティ（医療関係以外のグループも含む）への参加を促す・場の構築という考えがなかったので、取り入れていきたい。そのほか、HIV陽性者の経済的な困窮も日本国内でも多く当てはまるケースである。Key Populationの中にはセックスワーカーも多いため、HIV陽性者となった後も生活に困窮しないような経済的なセーフティネット構築が必要だと再認識した。

また、HIV陽性者にいかに多くを語らせるかがメンタルヘルス向上のキーポイントと知れたのは今回の大きな収穫だった。一方的に話したり語るのではなく、本人から主体性をもって意見を述べてもらうことが心と体の健康につながると知った。こちらはすぐにでも身近な活動で活かしたい。

一会議の成果を国内で還元する具体的計画

8月20日に鹿児島県の行政・医療従事者とRinかごしまでの会議が行われる。その際に、国際エイズ会議で学んだこと、重要である、県内でも活かせると思うポイントをプレゼンテーションする予定である。これにより、今後の県内での包括的なHIV陽性者支援につなげていけると確信している。また、その他にもRinかごしまが行う講演会・セミナー・ピアミーティングでも、上記に学んだポイントを参考にし、より質が高い活動を行いHIV陽性者の住みやすい街づくりを引き続き行っていく。

一会議の感想

今まで、自身がHIVに関して持っている情報があまりにも少なく活動していても内容の理解が難しいことがあった。医療従事者でもなく、公に学ぶ機会も少ない中で、何をどこから知ればいいのかも正直よく分からない状況だった。今回の国際エイズ会議は、マクロからミクロまで様々な視点で各国の研究成果を聞くことができた。またオンラインでの実施であり、期間中は何度でも録画されたプレゼンテーションを見ることができたので、興

味を持ったものはいくつでも見れるなど、自由度も高かった。発表されていた研究成果は、どれも諸外国の事例とはいえ、問題点や施策の上での課題など県内のそれと共通することが多かった。特にスティグマがメンタルヘルスに及ぼす影響や対策等はローカル地域にも落とし込める内容だったと思う。ぜひ県内での取り組みで活かし、結果を出していきたい。そして、このような会議への参加の機会があればぜひまた応募したい。